

資料論文

保育実習科目における科目間連携の試み

— 「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」と「保育の計画と評価」の連携実践 —

An Attempt at Interdisciplinary Collaboration in Childcare Practicum Courses : Collaborative Practice in “Childcare Internship Guidance II & III” and “Childcare Planning and Evaluation”

佐藤牧子 国際学院埼玉短期大学幼児保育学科
東 敦子 国際学院埼玉短期大学幼児保育学科
相田まり 国際学院埼玉短期大学幼児保育学科

本稿では、保育者養成課程における「保育実習指導Ⅱ」「保育実習指導Ⅲ」と「保育の計画と評価」との科目間連携の試みについて検討する。本研究では、指導案の作成と模擬保育、および振り返りを通して保育における PDCA の過程を実践的に学べるよう、授業を構成した。その際、授業資料の管理についても工夫した。その結果、学生がそれまで断片的になりがちだった各科目の知識を相互に関連するものとして理解すると同時に、一つの指導案に対して繰り返し吟味することで、よりよい保育へとつながっていくことを実感を持って学べていたことが明らかとなった。一方で、連携をスムーズに行うためには授業のスケジューリングや準備等の点で課題があることも明らかになった。

キーワード：科目間連携、保育実習指導、保育の計画と評価、保育者養成

1. はじめに

1-1 問題の所在

保育者養成課程では複数の科目が体系的に配置されているものの、実際の授業運営においては科目間のつながりが学生にとって必ずしも可視化されているとは言い難い。その結果、他科目で扱われた内容が十分に結びつけられず、学びが断片化する可能性がある。科目間連携の必要性は早くから指摘されており、保育現場で求められる実践力の育成には科目横断的視点が重要であること、さらに理論科目と実践科目を構造的に接続する授業デザインの必要性も示されている（広渡・讃岐, 2012；榊原・杉山, 2017；坂元・森木, 2018）。しかし、こうした連携を授業内でどのように構造化するかについては、なお検討の余地がある。

筆者らはこれまで保育指導案の指導方法を検討する中で、理論と実践の往還が十分に経験されていないことや、PDCA サイクルが一巡にとどまる傾向を課題として指摘してきた（佐藤・原, 2022）。さらに、指導案指導を科目内で完結させず、関連科目間で情報を共有し、総合的に指導する体制の必要性にも言及している（同上）。同様の課題は、実習における指導案作成の在り方を検討した研究においても指摘されている（小林, 2020）。

以上より、理論と実践を往還する学習過程を科目間連携の中で構造化し、学生に可視化するという課題意識のもと、本研究は構想された。

1-2 本研究の目的と意義

本研究の目的は、「保育実習指導Ⅱ」「保育実習指導Ⅲ」「保育の計画と評価」の担当教員による継続的な協働実践において、各科目の役割や相互関係を整理するとともに、その過程における課題を明らかにすることである。本実践は、学生が保育におけるPDCAの過程を実践的に習得し、科目間の関連性への理解を深化させることに、その意義が見出される。

2. 事前調査

本実践を開始するにあたり、学生がこれまでに授業間の連続性をどのように認識しているかについての調査を行った。具体的には、授業資料の参照の実態や管理方法などについて調査し、本実践の設計を検討するための基礎資料とした。

2-1 倫理的配慮

本調査は、科目間連携の内容および調査の目的・方法、参加が任意であり成績に影響しないこと、結果は授業改善および学会発表・論文等に活用するが、個人が特定されないよう配慮することを事前に口頭・文書で説明し、同意を得て実施した。事前調査はフォーム上で同意した学生のみが回答し、事後調査も文書による同意のもと行った。なお、本調査は本学研究倫理審査委員会の承認（KG25010）を得ている。

2-2 調査概要

事前調査として、Microsoft Formsを用いたアンケート調査を2025年4月に、保育実習指導Ⅱ・Ⅲ第1回授業において実施した。対象者は、本学幼児保育学科で「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」と「保育の計画と評価」を履修している学生（主に2年生）44名であった。履修学生全員に調査の趣旨を説明した上で参加への承諾が得られた学生を対象とした。

2-3 結果の概要

以下に、実施した質問の主な結果を示す。有効回答数は43名（97.7%）であった。

「指導案作成時に他科目の授業資料を参照しているか」については、「指導案作成時に参照した」が42名（97.7%）、「記録作成時に参照した」が39名（90.7%）であった。「指導案・記録の指導において授業者に求める内容」について、自由記述で回答を求めたところ、「模範例や具体的な記入例を提示してほしい」という声が多く挙げられた。また、子どもの姿^{*)}の捉え方や記述の仕方などについて、「どのような視点でどこまで書けばよいのかを明確に示してほしい」という意見も見られた。さらに、「書き方を練習する機会があるとよい」など段階的な指導を求める声も確認された。これらの記述から、学生は形式そのものよりも、判断の基準や具体的なイメージの共有を求めていることがうかがえた。

「授業資料の管理方法」については、「バインダーによる管理」が45.5%、「クリアファイルによる管理」が43.2%、「科目によって管理方法が異なる」が9.1%、「その他」が2.2%であった。バインダーによる管理の場合は、「曜日ごとに時系列で整理している」が

80%と最も多く、「全ての科目を1つのバインダーに時系列で整理」が15%、「科目ごとに時系列で整理」が5%であった。一方、クリアファイルによる管理の場合は、「科目ごとに時系列で整理」が26.3%、「全ての科目を1つのクリアファイルに時系列で整理」が21.1%、「曜日ごとに時系列で整理」が21.1%、「科目ごとに整理せず管理」が21.1%、「全ての科目を1つのクリアファイルに整理せず管理」が10.5%であった。

2-4 考察

以上の結果から、学生は指導案や記録作成などにおいて他科目の内容を参照しようとする姿勢を有していることが示された。しかし、その接続は個人の判断や工夫に委ねられており、計画と振り返りの知識が十分に関連づけられていない可能性が示唆された。「何を基準に判断すればよいのか」という戸惑いは、実習経験と授業内容を結びつける見通しが十分に共有されていない状況を示している。資料管理の在り方は学びの構造化と関係していると考えられるため、科目ごとの学びをどのように整理するか、実習との連続性の中でどう位置づけるかといった枠組みが共有されていない実態がうかがえた。

以上より、学生は自発的に学びを接続しようとしているものの、その接続は体系的に構造化されておらず、科目間の関連を意図的に構成し、学びの連続性を可視化していく必要性が明らかとなった。

3. 実践概要（2025年度）

3-1 対象科目の概要および授業構成

本実践の対象は、演習科目である「保育実習指導Ⅱ」と「保育実習指導Ⅲ」（以下、「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」と表記）および、講義科目である「保育の計画と評価」の両科目である²⁾。いずれも2年次に開講される、保育実習と密接に関連する科目である。「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」は保育士資格の選択必修科目で「保育実習Ⅱ・Ⅲ」と連動し、保育所及び保育所以外の福祉施設での実習に向けた指導を担い、学生の実践的経験を支える役割をもつ。一方、「保育の計画と評価」は保育士資格の必修科目であり、保育カリキュラム*や指導計画*、評価の理論を扱う科目として、実習における実践を理論的に整理する視点を提供する。2024年度までの状況として、本学では実習連絡会を定期的で開催し、1年次に履修する「保育実習指導Ⅰ（保育所）」「保育実習指導Ⅰ（施設）」および2年次に履修する「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」の担当者が情報交換を行い、指導案等の書式の共通化など、指導の一貫性を確保するよう努めてきた。一方で、指導案等の具体的な書き方を扱う「保育の計画と評価」との連携については、これまでは行われてこなかった。2025年度は、「保育実習指導Ⅱ」と「保育の計画と評価」の担当が同一教員であったことから、「保育実習指導Ⅲ」も含め、「保育の計画と評価」との科目間の連続性を意識した連携を試みることにした。具体的には、「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」の中での模擬保育を中心とし、指導案の作成・修正等の取り組みについて、担当教員3者で継続的に話し合いを重ねた。授業概要については以下の通りである。

【保育実習指導Ⅱ】 担当：佐藤牧子、相田まり／火曜日開講／履修学生：39名

【保育実習指導Ⅲ】 担当：東敦子／水曜日開講／履修学生：5名

【保育の計画と評価】 担当：相田まり／木曜日開講／履修学生：46名

3-2 科目間連携の概要

(1) 科目間連携の目的

- ① 講義科目「保育の計画と評価」と演習科目「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」の連携を通して、理論と実践のつながり（往還）への理解を深める。
- ② カリキュラム・マネジメントの視点に立ち、PDCA サイクルを意識しながら学習に取り組むことで、計画・実践・振り返りを循環的に捉える力を養う。

(2) 授業の構成

①基礎的な知識・理論の学習、②指導案の作成、③模擬保育の実践と振り返り、という3つの段階で構成し、理論科目の内容を実習指導における具体的課題と接続し、相互に参照しながら理解を深められる枠組みを意図した。

■ 理論科目と実習指導の構造的接続①基礎的知識・理論 ※表1 黄色マーカー

「保育の計画と評価」において扱う計画理論と、「保育実習指導」における実習課題の設定および実践理解を接続することを意図して授業構成を行った。

[保育の計画と評価]

保育における計画と評価の意義を確認した上で、保育カリキュラムの構造と指導計画の位置づけを学び、全体的な目標と個別の実践との関連を理解することを重視した。

[保育実習指導Ⅱ・Ⅲ]

保育所や施設の役割と目的を確認した上で、実習課題を設定し、事例を通して子どもおよび保育者に対する理解を深める学習を進めた。また、日々の目標の立て方を検討する中で、実践をどのような視点で捉え、どのように方向づけるのかを具体的に検討した。

[連携の構造とねらい]

「保育の計画と評価」で扱ったカリキュラムの構造や指導計画の視点を、「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」における実習課題の設定や目標設定に意識的に接続させた。

■ 理論科目と実習指導の構造的接続②指導案作成 ※表1 水色マーカー

「保育の計画と評価」で扱う指導計画の理論的枠組みと、「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」で実施する模擬保育および実習先での責任実習の指導案作成を意図的に接続する構成とした。

[保育の計画と評価]

指導案作成を保育の実践を構想する思考のプロセスとして位置づけた上で、子ども理解*および教材研究の視点から責任実習を想定した指導案を作成した。その後、相互添削と修正によって指導案を改善するプロセスを体験的に学ぶ構成とした。

[保育実習指導Ⅱ・Ⅲ]

「保育の計画と評価」での指導案作成に向けて、責任実習の位置づけや意義を確認した。ここでは、「保育の計画と評価」で扱った構想の視点や教材研究の考え方を参照しながら、責任実習の内容を具体化することを促した。

[連携の構造とねらい]

「保育の計画と評価」で理論的に扱った指導計画の構想原理（子ども理解に基づく構想、教材研究に基づく構想）を、「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」における責任実習の指導案作成に、実際に活用できるよう授業内容を構成した。指導案を“書く”ことと、実習で“実践すること”を分断せず、理論と実践を往還させ指導案を再構成していく枠組みを形成した。

■ 理論科目と実習指導の構造的接続③模擬保育の実践と振り返り ※表1 **ピンク**マーカー

本実践では、「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」における模擬保育の実施および振り返りと、「保育の計画と評価」における評価理論および指導計画の検討とを接続する形で授業を構成した。

〔保育の計画と評価〕

動画および他者からのコメントをもとに、模擬保育の評価と改善をどのように行うかを実践的に検討した。その際、保育における振り返りと評価は、保育の実践をよりよいものへと改善していくための思考過程であることを強調した。

〔保育実習指導Ⅱ・Ⅲ〕

模擬保育実施後の段階的な振り返りと評価（①～④）により、指導案と実践との関係を検討した。その際、模擬保育の実践を録画したものを参考資料とした。「保育の計画と評価」で扱った指導計画の構造や評価の視点を参照しながら、模擬保育を分析することを促した。

〔連携の構造とねらい〕

模擬保育を指導計画の枠組みの視点をを用いて再構成する構造を意図的に組み込んだ。これにより、計画（Plan）—実践（Do）—振り返り・評価（Check）—改善（Act）という循環的な学びの過程を、理論と実践の往還の中で体験できるよう構成した（図1）。なお、下記の図1については授業資料として学生にも配付した。

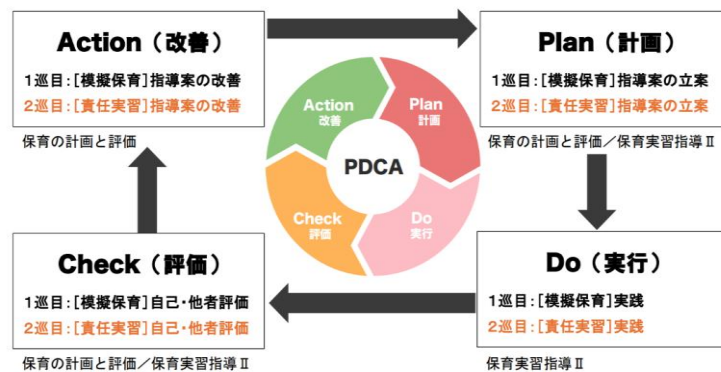


図1 保育におけるPDCAを意識した学びの過程

表1 授業スケジュール(最終版) ※「保育の計画と評価」の休講に伴い再調整を行った。

保育実習指導Ⅱ（火曜日）		保育実習指導Ⅱ（水曜日）		保育の計画と評価（木曜日）	
1	4/8 保育実習Ⅱの目的と内容	1	4/9 保育実習Ⅲの目的と内容	1	4/10 保育の計画と評価の意義
2	4/15 実習Ⅰの振り返り 保育のマナー	2	4/16 施設実習の振り返り	2	4/17 カリキュラムの基礎理論
3	4/22 保育所の役割と目的 実習課題の設定	3	4/23 実習課題の設定 保育のマナー 保育士に求められる倫理観	3	4/24 保育カリキュラムの構造と全体計画
4	4/29 保育士に求められる倫理観	4	4/30 施設職員の職種役割	4	5/1 指導計画の書き方・捉え方
5	5/13 事例を通した子ども理解、保育者理解 日々の目標の立て方	5	5/14 施設の援助技術 発達障害の理解		
6	5/20 記録の意義 デイリープログラムの理解	6	5/21 施設の援助技術 障害の重い人の理解と対応 実習Ⅱ時系列記録の見直し	5	5/22 指導計画の構想の仕方① 子どもの姿から構想する
7	5/27 事例検討 エピソード記録の練習	7	5/28 福祉施設利用児の理解 エピソード記録の練習	6	5/29 指導計画の構想の仕方② 教材から構想する（事例）
8	6/3 責任実習について	8	6/4 責任実習について	7	6/4 教材研究について
				8	6/5 責任実習の指導案作成
9	6/10 実習前試験 指導案の作成	9	6/11 実習前試験 模擬授業1：乳児院	9	6/12 指導案の相互添削と修正
10	6/17 模擬保育1（個別に12名前後実施）	10	6/18 実習書類作成 模擬保育2：児童養護施設	10	6/18 模擬保育の振り返りと評価① 記録の方法と技術
				11	6/19 様々な指導計画
11	6/24 模擬保育2（個別に12名前後実施）	11	6/25 個別支援計画 模擬保育3：母子生活支援	12	6/26 模擬保育の振り返りと評価② 模擬保育のエピソード記録
12	7/1 模擬保育3（個別に12名前後実施）	12	7/2 就学支援計画 模擬保育4：児童発達支援	13	7/3 模擬保育の振り返りと評価③ カリキュラム・マネジメントについて
13	7/8 模擬保育4（個別に12名前後実施）	13	7/9 模擬保育5：障害者施設	14	7/10 模擬保育の振り返りと評価④ 幼保小の連携プログラム
14	7/15 学長講話、科目の振り返りとまとめ	14	7/16 学長講話、科目の振り返りとまとめ	15	7/17 科目の振り返りとまとめ
15	10/6 実習事後指導	15	9/29 実習事後指導		

(3) 連携の工夫

① 連携内容の意識化

各科目の授業内における接続内容を具体的に示し、どの授業内容が互いに関連しているのかを明確にした。これにより、学生が科目間のつながりを意識しながら学習に取り組むことができるよう工夫した。

② 授業資料の管理に関する指導

科目間連携にあたり、授業資料の管理が課題となると予想されたため、履修学生を対象に、事前調査(3-2)を行った。その結果から、授業資料の管理に関する指導が必要になると判断されたため、「保育の計画と評価」と「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」で使用する資料を一つのファイルにまとめ、どちらの授業にも持参することを授業ルールとして取り入れた(事前調査の結果は後述する)。

③ 模擬保育に関する資料の共有

「保育の計画と評価」において実施した相互添削の方法およびフォーマット(資料1)については、1年次の「保育実習指導Ⅰ」で使用したものを継続して用いた³⁾。科目間で異なる基準や形式を採用することによって学生に混乱が生じることを避けるとともに、評価の視点を共有した上で学習内容をより深化させることを意図した。

なお、他学生の指導案を共有することも、教科書的な模範例を参照するだけでは得られない、指導案と実践とが結びついた具体的経験の蓄積につながると考えられたため、模擬保育の際に作成した指導案は、グループ内で共有した。

④ 「理論と実践の往還」と「PDCA サイクル」の可視化

「理論と実践の往還」および「PDCA サイクル」の実感を可視化することを目的として、科目間で実施してきた内容を、「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」の合同授業(第14回目)において改めて整理した。具体的には、これまでの学習内容を一つ一つ振り返りながら、Plan(計画)、Do(実践)、Check(振り返り・評価)、Action(改善)の順に、各段階を示す表紙(図2)を、授業資料を綴じたファイルのそれぞれの該当資料の最初に差し込みつつ構造化した。その上で、PDCA サイクルを継続的に実践することの重要性を確認するとともに、実習においても本資料を参照するよう促し、科目間連携の学びを総括した。

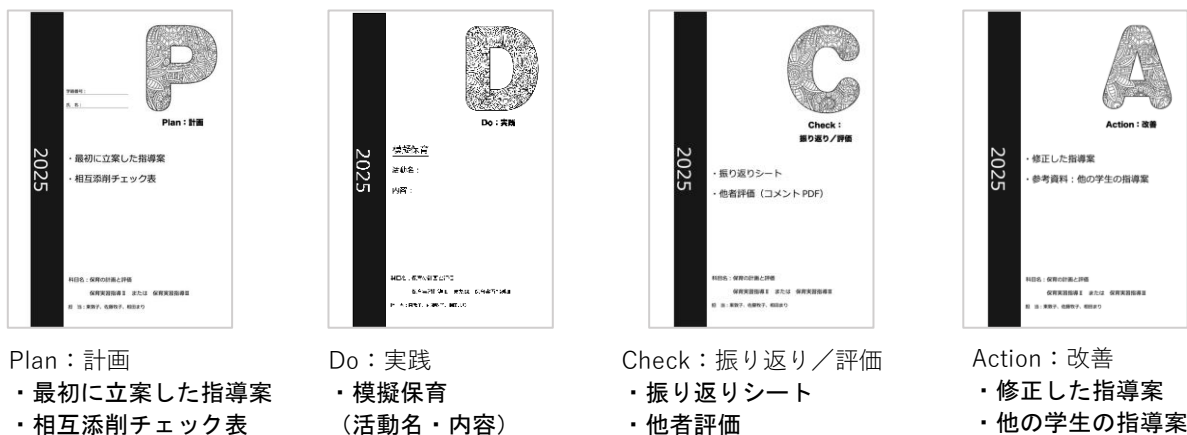


図2: PDCA サイクルを実感できるように科目間の資料をフィアリングするための表紙

4. 事後調査

本実践の効果を検証するために、授業に参加した学生を対象とした事後調査を行った。これらの調査の結果は、担当教員による実践の整理を行うための資料として位置づける。

4-1 倫理的配慮

本調査を行うにあたっては、前述の事前調査と同様の倫理的配慮を実施した。

4-2 調査概要

事後調査を2026年2月6日から8日にかけて実施した。調査方法は、Microsoft Forms を用いた選択式のアンケート調査および半構造化インタビューである⁴⁾。対象者は、科目間連携の授業に参加した学生（主に2年生）であり、対象数は3名であった。内訳は、「保育実習指導Ⅱ」の履修学生が2名、「保育実習指導Ⅲ」の履修学生が1名である。選定方法としては、科目間連携の取り組みを経験した学生の中から、日頃の課題等への取り組みにおいて、当該経験について具体的な事例を提示しながら学びを言語化することに長けていると判断された学生を対象として選出した。

4-3 結果の概要

アンケートの回答数は3件（100%）であり、質問項目および主な回答は以下の表2に示す通りである（紙幅の都合により一部割愛）。

表2 事後調査の結果

[質問] 1. 今回の科目間連携の取り組みで、印象に残っていることはありますか。
[結果] <ul style="list-style-type: none">・ 指導案の書き方を詳しく学べたこと・ 同じエピソードでも人によって書き方が異なること・ 模擬保育を行い、その後グループで振り返りを行ったこと・ 模擬保育に対する評価を表にくださったので、目で見て分かりやすかった
[質問] 2. 「保育実習指導」と「保育の計画と評価」は、どのようにつながっていると感じましたか。具体的な場面があれば教えてください。
[結果] <ul style="list-style-type: none">・ 「保育の計画と評価」で学んだ、計画の立て方などをもとに「保育実習指導」で実際に計画を立てたり、模擬保育を行ったあと振り返りの時間が十分にあったりと、一つの内容を倍の時間をかけて学んでいるように感じた・ 指導案を何度も書き直し、模擬保育したことでPDCAサイクルが行われていると感じ、より良い保育に繋がっていることを学びました
[質問] 3. (1) 実習中に授業で学んだ内容を参考にした場面はありましたか。
[結果] <ul style="list-style-type: none">・ 自分や他者の模擬保育の指導案を見て、責任実習で気をつけるポイントを振り返ったり、他者の良かったところを取り入れられるよう参考にしたりした・ 模擬保育で行った、時間の使い方や子どもたちへのルールの説明方法、指導案など責任実習を行うもの全てを参考にしました
[質問] 3. (2) 科目間連携がない場合と比べて、実習への向き合い方に違いはありましたか。
[結果] <ul style="list-style-type: none">・ 模擬保育に対して様々な角度からコメントしてもらえるので、連携はあってよかった

<ul style="list-style-type: none"> ・十分な時間をかけて準備を行ったことで、不安が少し和らいだように感じる ・科目間連携をおこなう場合、予定とズレてしまうと、教えてもらう内容もズレてしまう ・「施設は部分実習だけだから楽」と思われる
<p>【質問】 4. 実習前や実習中に、指導案や記録を書く際に、考えを整理しやすくなったと感じることはありますか。</p>
<p>【結果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導案に書く前にメモとして簡単に書くことで整理して書きやすくなりました ・昨年は先輩が実際に書いた日誌や、教科書の見本を見て、それを参考に書いていた。今回は、指導案を書く際のポイントなどをしっかりと座学で学んでから書いたことで、真似をしながらアレンジを加えるのではなく、より自分の考えをしっかりと書くことができたと思う
<p>【質問】 5. 連携科目の資料を一つにまとめて管理してもらいましたが、そのことについてどう感じましたか。また、資料を一つにまとめたことで、科目同士を別々のものとしてではなく、つながったものとして考える場面はありましたか。</p>
<p>【結果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中に分からない部分を見返すこともできた ・両方の授業でそのファイルを持っていくため、つながっていることを改めて思い出すきっかけになっていた ・責任実習の指導案を考える時も、ファイルを見ることで二つの科目で学んだことを照らし合わせながら見直していた
<p>【質問】 7. 今後、さらに工夫できるとしたらどのような点があると思いますか。</p>
<p>【結果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・模擬保育の指導案や振り返りの内容をグループ以外でも共有できたら、より実習で役立つことができると思う ・動画を恥ずかしくて見ることができないと言っていた人がいたが、良いことも悪いことも動画で見ると詳しく振り返ることができるため、全体で見られるような工夫があると良い ・保育実習指導Ⅲの受講者だけ孤独感を感じていた

4-4 考察

事後調査では全体として、今回の科目間連携により、学生自身が理解の深まりと技術向上を一定程度実感していることが示された。例えば模擬保育に関しては、他者との相互評価により視野が広がり、自己や他者の指導案および模擬保育を多角的に捉えられるようになったとの意見がみられた。また、模擬保育の実践を撮影した動画や他者からの評価を記録として残す（視覚化する）ことで、学生が自身の実践を客観的に捉え、振り返る助けとなっていたことや、科目間で資料を共有・活用することで、科目同士の関係やつながりを実感する契機となっていたことが明らかとなった。

今回の科目間連携では、両科目にわたり〈基礎的知識・理論の学習→指導案の作成→模擬保育の実践→振り返り〉を行うことで、保育におけるPDCAの過程を一通り経験し、これまで各科目で断片的に行われていた工程が全体としてまとまりをもって捉えられたことが、学生の回答からうかがえた。その際、両科目の資料を一つにまとめ、ファイルの冒頭に授業スケジュール（表1）を綴じたこと、また、連携の意義や目的を事前に伝え理解を共有していたことが、科目間のつながりを意識する上で有効に機能したことが示された。

また、授業で作成した指導案を実際の実習で活用するなど、授業で学んだ内容を現場の実践と結び付けて捉える姿勢もみられた。この背景には、一つの指導案を繰り返し吟味したことで、単にPDCAの手順を追うだけでなく、その過程で自身の考えが深まり、保育が

よりよいものへと進展していくことを実感を伴って学べたことが関係していると考えられる。科目ごとに指導案作成や模擬保育を行う場合、時間的な制約により、模擬保育後の振り返りの時間が十分に確保できなかつたり、指導案作成のみで実践を行わないなど、PDCAの一部を短縮・省略せざるを得ない場合がある。しかし今回の科目間連携では、2科目（〔保育実習指導Ⅱ・Ⅲ〕と〔保育の計画と評価〕）の内容を連関させ、双方の時間を用いて一つの指導案の作成から実践、振り返りまで実施した。その結果、各科目のつながりが実感として捉えられ、理論と実践の相互関係を自身の経験を通して学ぶことができたと考えられる。

一方で、授業スケジュールや欠席者への対応、実習種ごとの履修者数の違いへの対応など、科目間連携の課題も明らかとなった。授業スケジュールリングに関しては、いずれかの授業を1回欠席すると内容の遅れが生じる。また、不測の事態による休講時にも、綿密に組んだスケジュールが崩れる。そのため、学生に不利益が生じないよう個別フォローやスケジュール再調整が必要となることが明らかとなった。また、「保育実習Ⅱ」（保育所）と「保育実習指導Ⅲ」（施設）の履修者数の違いから、後者の履修学生が「保育の計画と評価」の授業内で指導案作成や模擬保育の振り返りを行う際に孤独感を抱く、あるいはグループワークの時間配分に差が生じるなどの課題も浮かび上がった。

5. 実践の成果と今後の課題

ここまでの内容を踏まえて、本章では本実践における成果と課題を整理する。

5-1 連携による成果

今回の科目間連携では、「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」と「保育の計画と評価」の双方において、PDCA サイクルに基づく学習過程を実践的に経験させることにより、学生が保育における計画・実践・振り返り・改善の一連の流れを統合的に理解できた点が共通の成果として挙げられる。とりわけ、一つの指導案を繰り返し吟味・修正し、実践と振り返りを重ねる過程を通して、保育がPDCAの循環として構成されること、およびその過程を丁寧に行うことが保育の質の向上につながることを、学生が実感を伴って理解できたことは重要である。また、相互評価や資料共有を通して、多角的な視点の獲得や学びの深化が促された点も共通して確認された。

その一方で、各科目の役割には明確な相違がみられた。「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」では、模擬保育を中心としたDo（実践）の側面を主に担い、実践を通じた学びの具体化に寄与した。また、教員にとっても、学生の学習状況や課題を横断的に把握し、授業デザインに反映できるという効果がみられた。一方、「保育の計画と評価」では、基礎的知識・理論の学習を基盤としつつ、Plan（計画）、Check（評価）、Action（改善）を体系的に扱い、実践を支える枠組みの理解を促す役割を担った。特に、従来は十分に扱われていなかったDo以降の過程までを含めて実践的に学ぶ機会を提供した点や、実習への接続を通して学習意欲の向上につながった点が特徴的であった。

5-2 見えてきた課題

今回の科目間連携における課題として、まず両科目に共通して、授業準備および運営に

要する負担が増大したことが挙げられる。具体的には、各科目間で進行を合わせるための綿密なスケジュール調整や、授業開始後の進捗・理解度の共有とそれに基づく微調整、さらに欠席者への個別対応などに多くの時間を要した。また、授業の連続性を前提とする構成であったため、一部の授業の遅延や欠席が全体の学習過程に影響を及ぼしやすく、再調整や補完的指導の必要が生じたことも共通の課題であった。

その上で、各科目固有の課題も明らかとなった。「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」においては、授業内容を相互に組み込みながら進める取り組みが初めてであったため、授業進行の調整や連携の在り方そのものに難しさがみられた。特に保育実習指導Ⅲでは、履修者数の少なさに起因する孤独感といった問題も指摘された。

一方、「保育の計画と評価」においては、本連携における両科目（「保育の計画と評価」と「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」）のうち、一方の科目のみを履修する学生に対して、実践機会や振り返りの時間を十分に保障することが難しく、科目間連携の効果を十分に提供できないという問題が生じた。また、短期間での課題の採点や模擬保育に伴う授業準備の負担に加え、欠席者への継続的な個別対応および教員間での情報共有の必要性から、授業準備時間が大幅に増加した。

以上より、科目間連携は学習の質を高める一方で、授業運営上の負担増大や履修構造に起因する不均衡といった課題を伴うことが明らかとなった。

6. おわりに

本稿では、教員間の協働的検討を通じた「保育実習指導Ⅱ」「保育実習指導Ⅲ」「保育の計画と評価」における科目間連携の取り組みを整理し、その要点を検討した。今回の取り組みでは、保育の計画・実践・評価への理解を深めるとともに実践的学びを保障するため、基礎的知識・理論を学習した上で、保育におけるPDCAの循環を「指導案の作成・検討→模擬保育→振り返り→指導案修正」を通して学ぶ形で授業を構成した。その結果、従来は各科目（連携科目以外も含む）で個別に行っていた工程が、一つのつながりをもつ実践として捉えられ、一つの指導案を繰り返し吟味し他者の視点も取り入れて検討することで保育が改善される過程を、学生が実感をもって理解できた。また、授業資料の管理方法を工夫することで、科目間のつながりを捉えやすくなることも確認された。同時に、教員にとっても、科目ごとでは内容を深める時間が十分確保できないという課題があったが、相互連携によりその機会と時間を確保することができた。

一方で、これらの連携を円滑に行うには各科目の教員が常に情報を共有し、綿密に授業内容を構成・調整する必要があること、一方のみ履修している学生や欠席者への個別対応、休講時のスケジュール再調整などにより授業準備時間が増大するという課題も明らかとなった。なお、今回は「保育の計画と評価」が保育士必修科目であったため「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」と連携したが、本学では幼稚園教諭養成も行っており、教育実習指導との連携にも利点があると考えられる。また、実習関連科目に限らず、保育士および幼稚園教諭養成課程の各科目にも同様のことがいえる。科目間連携は教員個人の裁量に委ねるものではなく、教員間の協働を基盤としたカリキュラム・マネジメントとして構想される必要がある。これらの視点を踏まえ、他科目も含めた連携について今後さらに検討していきたい。

謝辞

本実践に参加し、科目間のつながりを意識して学びに取り組んだ学生に感謝する。また、事前・事後調査に協力し、貴重な意見を寄せたことにも謝意を表す。本実践は、教員間の継続的な対話と協働を通して構想・運営されたものである。

注

- 1) 以下、「*」マークを付した用語の定義については、厚生労働省（2018）を参照。
- 2) 保育者養成課程における各科目の位置づけと概要については厚生労働省（2003）を参照。
- 3) 「保育実習指導Ⅱ」を担当した佐藤は、前年度に担当した「造形表現領域指導法」の授業内にて、模擬保育の実践と振り返りを行っている。
- 4) あらかじめ用意した質問項目について Microsoft Forms にて質問し、その結果に対して、Microsoft Teams によるチャット機能を用いて追加の質問を個別に行った。

著者の利益相反：開示すべき利益相反はない

文献

- 広渡純子・讃岐京子（2012）「保育者養成カリキュラムにおける科目間連携（1）—『保育内容言葉』と『保育表現技術』の連携—」『聖和論集』40, pp.69–78.
- 榊原尉津子・杉山佳菜子（2017）「保育現場で求められている能力とその指導（4）—科目間連携の重要性についての一考察—」『鈴鹿大学短期大学部紀要』37, pp.125–133.
- 坂元恵子・森木朋佳（2018）「科目間の連携を意識した授業デザインのあり方—『乳児の保育Ⅱ』と『こどもの健康と安全』での実践を手掛かりに—」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』48, pp.137–148.
- 佐藤牧子・原孝成（2022）「保育者養成における『保育指導案』の指導方法に関する検討」『目白大学総合科学研究』18, pp.123–133.
- 小林美花（2020）「保育実習における指導案の現状と今後の可能性」『北翔大学教育文化学部研究紀要』5, pp.45–52.
- 厚生労働省（2003）「指定保育士養成施設の指定及び運営基準について」（平成15年12月9日）別紙3「教科目の教授内容」（2026年3月26日最終アクセス）
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00ta9772&dataType=1&pageNo=2
- 厚生労働省編（2018）『保育所保育指針』フレーベル館.

資料1：指導案の相互添削チェック表

保育の計画と評価2025

学籍番号

氏名

責任実習指導案の相互添削チェック表①

項目	No	評価基準	○ or コメント
基本項目	1	実施年月日、時間、対象児の年齢、クラス名、担任氏名、子どもの人数がすべて記載されている。	
子どもの実態	2	現在の子どもの姿が3つ以上の記載がある。	
	3	箇条書きでわかりやすく記載されている。	
活動のねらい	4	子どもが主語になっている。	
	5	子どもの実態、年齢に合った「ねらい」が明確に示されている。	
活動の内容	6	子どもが主語になっている。	
	7	「ねらい」を実現するための「内容」が示されている。	
	8	活動名ではなく、活動の内容が具体的に示されている。	

項目	No	評価基準	○ or コメント
時間	9	デイリープログラムに基づいて1日分の計画が記載されている。	
	10	活動の切り替えに合わせて時間が記載されている。	
環境構成	11	活動の展開に合わせて「環境図」が記載されている。	
	12	各活動の「環境図」にタイトルと記号の定義が記載されている。 タイトルの例：<保育室><ホール> 記号例：●子ども、○実習生、□保育者	
	13	それぞれの活動について、「準備物」の詳細が記載されている。	
	14	それぞれの活動について、「ルール」や「手順」などが記載されている。	
予想される子どもの活動	15	それぞれの場面での子どもの「活動」や「反応」「発話」などが、それぞれ2～3個ずつ（or それ以上）、具体的に記載されている。 例：積極的に取り組む姿／消極的な姿	
実習生の援助・留意点	16	「予想される子どもの活動」とリンクして書かれている。 内容と書く位置が対応している（横並びになっている）。	
	17	それぞれの場面での「援助内容」が具体的に記載されている。 例）ゲームのルールを説明する。	
	18	それぞれの場面での「留意点」が具体的に記載されている。 例）ルール説明をするときには、子どもがイメージをもてるように、実演しながら説明する。一人一人と目を合わせて、理解しているか確認しながら説明を進める。	

☆総合評価コメント（よかったこと、アドバイスなど）

添削者氏名